集書日誌69　高橋新太郎

学習院女子大学教授

『戦旗』『婦人戦旗』『コップ』など

横浜戸塚の湘南堂書店から、①『戦旗』三周年記念号（昭和6年5月号）と終刊号（昭和6年12月30日）、②『婦人戦旗』創刊号（昭和6年5月1日）と終刊号（昭和6年12月30日）、③『産業労働時報』号外（昭和7年7月28日）、④日本プロレタリア文化聯盟中央機関紙『コップ』第二号（昭和8年5月28日）等々を得た。

『戦旗』は復刻版も出版されているが、やはり時代の空気の染みわたった原物を手にしたくなる。

①の記念号は、メーデー記念号とも謳っているのだが、発行日付は五月二十一日で大幅な遅れである。これは、四月二十七日、すでに製本が済み発送準備が終る直前に印刷屋から五月号一万一千部がまるごと官憲に押収され、紙型も写真版も凸版も残されていない中で、すべての原稿をあらためて集め直した新編輯号の故である。昭和五年五月から、当局の『戦旗』への発行妨害がますます強化され、発禁押収という常套手段から、紙屋・印刷屋に圧力をかけ、詐欺事件をデッチ上げて告訴させたり、改訂版の発行すら許すまいとするなど、経済的に発行を不能にするような戦術をとった。また〈戦旗の編輯発行人である〉という理由で、山田清三郎を治安維持法で豊多摩刑務所に収監するなど、『戦旗』の合法性を実質的に奪おうとする意図による。結局『戦旗』は新聞判四ページの第四巻第十号をもって終る。

②は、初め『戦旗』五月号臨時増刊として発刊されたが、八月第二号より新聞紙法により『戦旗』から独立して発行、十月十三日に九、十合併号を出し共に発禁処分を受けた。日本プロレタリア文化聯盟発足と〈戦旗社の発展的解消〉により計四冊を刊行して終刊。後継誌として『働く婦人』（昭和7年1月）が創刊され、これも早速発禁となる。

③は第四十一号の付録で〈反戦特輯〉。「太平洋上血雨の闘争」と題する記事に〈アメリカは日本の不倶戴天の敵である。両国は永年太平洋の覇権を狙つてゐるのだ。極東戦争は日米の関係をひどく悪化した。この戦争自身来るべき×米戦争の為に資源を確保するのが目的の一つだつた。英米の世界制覇の闘争、極東に於ける日英の対立が之に結びついて太平洋上には相争ふ三国の血みどろの戦争が迫つてゐる〉とある。

④では、プロット、メザマシ隊の沢村貞子が〈階級闘争の一翼としての文化運動の正当性〉をのべ、統一審議を要求して、「公判闘争の決意」を表明している。